OPINION

オープンカレッジ

愛知淑徳大学
ビジネス学部准教授
鄭 年皓氏

国際的な共存模索の示唆に

我々は、日常生活の中で「ネットワーク」という言葉をほぼ毎日使っている。こうしてネットワークといえば、コンピュータシステムやインターネット等、ICT（情報通信技術）の世界を思い浮かべる人々が多い。

しかしながら、ICTのように狭い意味としてのネットワークではなく、その意味を接続・連結・つながりという多少抽象度の高い意味として広く捉えると、我々は実に多くのネットワーク関係に置かれていることがわかる。すなわち、我々は血縁関係・友人関係・仲間関係はもちろん、地域社会や国際社会という、多様なネットワーク関係の重なり合いの中で毎日過ごしているのである。

また、上記の接続・連結・つながりの観点に立てば、鉄道や道路のような交通網、生物の神経系、生態系、さらには地球や宇宙もネットワークである。ネットワークは必ず要素と全体によって構成される。こうしたネットワークにおける要素と全体の関係は、自然現象や物理現象のように比較的定型化した場合と、人のつながりやグローバル経済のように非定型化した場合に分けられる。

特に、後者は自律性と分散性を有する相互異質的な要素（人や組織）が、絶え間なくネットワークを形成・拡張したり、解体したりとすることによって、あいまいさや複雑性を増大させる。したがって、こうした多重で多様なネットワークの世界に置かれているため、我々の日常生活のみならず、社会経済システムにおける「予期せぬ結果」が日常茶飯事で生じるのである。ここで、ネットワーク思考が求められる。

「ネットワーク」思考

ネットワーク思考は、要素と要素の部分的なつながりはもちろん、全体としてどのようにつながるかという2つのアプローチを重視する。なぜなら、部分的にしか見えない要素と要素のつながりが、全体の性質を定めたり、逆に全体の性質が要素と要素のつながりを定めたりする場合が多いからである。しかも、要素（部分）と全体は、綺麗な場合分けができず、常に相互作用をしながら絶え間なく変化するのである。

したがって、ネットワーク思考は、ある人やある組織等、一つの要素のみに着目し分析する観点（要素還元主義的な観点）ではなく、人と人、組織と組織、地域と地域等といった多者間関係に注目し、全体としての「ネットワーク」の生成と拡張、さらにはその解体を分析しようとする。また、その上で、一見異質的に思われがちなネットワーク構造の類似性や、共通したメカニズムを究明しようとするのである。

そのため、複雑な関係（ネットワーク）が絡み合う社会現象や経済現象に対して、既存の要素還元主義的な観点の限界を克服すべく、ネットワーク理論によるアプローチが益々多くなっている。さらに、ネットワーク思考は、異質的な要素（人や組織）と要素のつながりを重視するからこそ、社会科学的な研究視座のみならず、異質的な文化を前提としたグローバルな共存と繁栄を模索していく際の大きな示唆をも与えるであろう。

じょん にょんほ 経営科学。明治大学大学院商学研究科博士後期課程修了。博士（商学）。1973年生まれ。